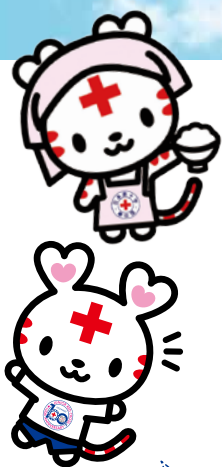


Red Cross Volunteer



collaboration

The Red Cross Volunteer Corps × JRC



特集 1 | 赤十字奉仕団 × 青少年赤十字
コラボ活動紹介

特集 2 | ボランティアメンバーに聞く ~青少年赤十字を経て、今思うこと~

特集 3 | 対談 赤十字を次世代へつなぐ

この情報誌は、RCV編集委員(ボランティア)の協力で作られているガー!
※委員の声は、裏表紙に載っています。



赤十字奉仕団 × 青少年赤十字



赤十字奉仕団は、日頃から地域の学校に対する青少年赤十字活動への参加促進や青少年赤十字メンバーとの交流等により、これからの赤十字運動の担い手であり、赤十字の仲間でもある青少年赤十字と共に活動してきました。赤十字奉仕団と青少年赤十字がどのように連携して活動に取り組んでいるのか、全国から6つの活動をボランティアから紹介します！



今年で100周年！！



青少年赤十字 (Junior Red Cross / JRC) とは？

学校における教育や部活動等の日常生活の中で、赤十字の精神に基づいた活動を行い、学校と連携しながら子どもたちの中にある思いやりの心を育む活動を展開しています。令和4年3月末時点で14,441校の全国の幼稚園、保育所、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等の学校が青少年赤十字に加盟しています。

01 山形県 三川町赤十字奉仕団

地域赤十字奉仕団による“地域力”向上を目指した活動

次世代を担う子どもたちと交流することにより地域の結束力向上を図ることを目的として、三川町立横山小学校(青少年赤十字加盟校)にお声がけしました。生徒にとって有益な時間になるよう交流内容を学校と相談し、米の炊き方を学ぶ家庭科の授業で、奉仕団員と共に災害時におけるポリエチレン袋のアイラップを用いた米の炊き方や新聞紙を用いた食器・スリッパ作成を学ぶ実習を実施。後日、受講した児童が自宅で実践して家族に好評だったという感想を聞いて、私たちの活動が子どもの「気づき、考え、実行する(青少年赤十字の態度目標)」につながっていることを実感でき、奉仕団活動への充足感をえました。

現在はコロナ禍で実施できていませんが、令和元年には地域の高齢者介護施設でのボランティア活動も青少年赤十字メンバーと共にを行いました。地域力向上に向け、引き続き子どもたちとの交流事業を行ってまいります。



災害時の調理方法を子どもに教えました

02 長野県 日本赤十字社長野県支部研修推進委員

奉仕団員による出前授業を通し、赤十字の精神を伝える

小学校から高校まで多くの学校から要望をいただいたことをきっかけに、出前授業を行っています。授業の内容は、「新型コロナウイルスに負けない心づくり※1」や日赤教材等を活用した防災教育など各学校のニーズに合わせ、時には青年奉仕団員にも協力してもらいながら実施しています。

「新型コロナウイルスに負けない心づくり」を実施した学校では、医療・介護従事者に感謝と応援の気持ちを伝えたいとの思いから、メッセージボードを作製し、近隣の医療施設等に寄贈しました。受講した子どもたち自らが「気づき、考え、実行」した結果だと感じています。

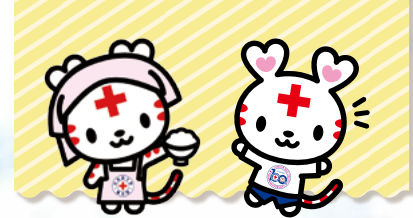
これからもボランティアの仲間と共に、より多くの学校で命の大切さの学習を通して赤十字の精神を伝えていきたいと考えています。



出前授業をきっかけに作製したメッセージボードを見せてくれました

※1：「新型コロナウイルスの3つの顔を知ろう！～負のスパイラルを断ち切るために～」を基に作成した長野県支部独自の人権教育プログラム。

コラボ活動紹介



03 埼玉県 埼玉県青少年赤十字卒業生奉仕団

青少年赤十字卒業生による青少年赤十字の活動援助

私たちは、埼玉県内における青少年赤十字の活動をサポートすることを目的として組織されている青年赤十字奉仕団です。リーダーシップ・トレーニング・センター※2(以下「トレセン」)のお手伝いだけでなく、青少年赤十字高校生協議会※3の打ち合わせや学習会のサポート等、青少年赤十字の活動支援を日頃から密に行っています。また、献血の呼びかけや街頭募金といった赤十字の活動を青少年赤十字メンバーと共に行うこともあります。

団員の多くが青少年赤十字卒業生であるため、自身の経験を活かして青少年赤十字メンバーの支援を行えることが魅力です。また、青少年赤十字メンバーは奉仕団を身近に感じることができ、青少年赤十字を卒業した後も赤十字に関わっていただくことができます。これからも青少年赤十字メンバーにとって頼れる先輩として、赤十字の魅力を伝えていきます。



学習会で障がい者体験をする高校生をサポートしました

※2：赤十字・青少年赤十字活動への理解を深めると共に、集団生活の中でリーダーとして必要な資質を身に付ける教育プログラム。

※3：青少年赤十字高校生メンバーによる協議会。活動の情報交換や仲間づくり等を目的とし、令和3年度は37支部で高校生協議会を開催した。

04 和歌山県 和歌山県特別救護奉仕団、大新赤十字奉仕団

特殊及び地域赤十字奉仕団による校内トレセン支援

2つの奉仕団が連携し、令和3年11月に和歌山市立大新小学校で開催された校内トレセンにて、ポリエチレン袋のハイゼックスを用いた炊き出し体験のサポートを行いました。

まず初めに、奉仕団から生徒に対しパネルを使用してハイゼックスを用いた炊飯の方法を説明しました。続いて、火や熱湯を使うため火傷しないよう子どもたちの側に奉仕団員がつき、炊き出し体験の補助を行いました。また、午後から実施したフィールドワークは校外での活動となるため、特別救護奉仕団員が各グループに付添い、交通事故防止などの見守りを行いました。

子どもたちが炊き出し体験等に熱心に取り組んでいるのを見て、やりがいを感じました。今後も奉仕団員がトレセン等の青少年赤十字活動に参加する体制を継続していきたいと考えています。



2つの奉仕団で連携し、炊き出し体験を補助しました

05 広島県 日本赤十字社広島県支部指導講師

講師の講話により、卒業後も赤十字活動を意欲的に継続

令和元年の青少年赤十字広島県高等学校協議会（以下「協議会」）役員から「例年、協議会が実施している『高校3年生を送る会』にて、高校卒業後のボランティア活動に向けて先輩ボランティアから経験談を伺いたい」と支部を通じて依頼がありました。講話では、青少年赤十字の卒業生がモチベーションを持って引き続き赤十字活動に関わってくれるよう、奉仕団活動の紹介や赤十字ボランティアとして活動する意義等を伝えました。以前は、青少年赤十字メンバーが高校卒業と同時に赤十字から離れることに関して課題意識を持っていましたが、この講話がきっかけとなり現在は、青少年赤十字経験者が青年赤十字奉仕団に入団して奉仕団役員を務める等、奉仕団と青少年赤十字がつながる結果となっています。

青年赤十字奉仕団入団後、青少年赤十字と奉仕団で培った知識や経験を活かし、人道ニーズに応えられる人材に成長しつつあると、講師として実感しています。



高校3年生に対し、赤十字活動について熱く伝えました

手つなぎボランティア



日本赤十字社愛媛県支部では、平成8（1996）年から5月の赤十字運動月間に合わせて「赤十字の仲間が手をつなごう、力を合わせて地域にボランティアの輪を広げよう」を合言葉に、県全体で赤十字奉仕団と青少年赤十字が協力して活動する「手つなぎボランティア」の活動に取り組んでいます。今回は、「手つなぎボランティア」を実施する2つの奉仕団分団にお話を伺いました。

分団長
新田 八重子さん松山市赤十字奉仕団
高浜分団分団長
森 美和子さん松山市赤十字奉仕団
潮見分団

子どもたちのエネルギーをもらいながら清掃活動 松山市赤十字奉仕団 高浜分団

私たちの団では以前から、松山市立高浜小学校（青少年赤十字加盟校）の児童や保護者の方々と、通学路や公園等、地区単位で異なる場所の清掃活動を実施していました。しかし、平成28年からは学校の方針により活動を一本化し、高浜小学校の全校児童や地域住民の方々と一緒に梅津寺海岸の清掃活動を実施しています。

この活動を通じて子どもたちからエネルギーをもらいながら、和気あいあいと楽しく活動しています。また、高学年のメンバーが低学年のメンバーにゴミの分別等を教えながら清掃する等の主体性を持った活動が見受けられ、毎年感心しています。

清掃による地域の環境美化活動は地域を守ることにもつながるため、青少年赤十字メンバーや地域住民と共に、地域で一丸となって今後も継続して活動に取り組んでいきたいです。

児童と地域住民の方々と一緒に
大勢で清掃活動を行なっています運動場の整備をきっかけとして、
子どもたちとつながりができればと思います

35年以上続く活動が地域のつながりに貢献 松山市赤十字奉仕団 潮見分団

私たちの団と松山市立潮見小学校（青少年赤十字加盟校）との活動は、35年以上前から継続して実施しています。現在は、毎年5月に開催する小学校の運動会に向けた準備の一環として、青少年赤十字メンバーだけでなく、公民館長や町内会長、地域の方々と共に運動場の草取りや落ち葉集めを行っています。

子どもたちと声を掛け合って活動したり、子どもたちが一生懸命活動している様子を見たりすることで、非常にエネルギーをもらえます。また、この活動が子どもや地域の方々との顔つなぎの場になっており、活動後に学校外で声を掛け合えるような関係性づくりや、地域における見守り活動にもつながっています。

手つなぎボランティアへの協力者の輪が広がっており、ボランティア活動がきっかけとなって地域のつながりができていると実感しています。今後も活動を継続していきたいです。

「手つなぎボランティア」の活動内容についてはP7でも紹介しています！



突撃インタビュー!

ボランティアメンバーに聞く

～青少年赤十字を経て、今思うこと～

高校1年生で青少年赤十字の活動に参加し、青年赤十字奉仕団を経て、現在は佐賀県赤十字無線奉仕団・佐賀県赤十字特殊輸送奉仕団に所属。15年に渡り赤十字の活動を続けている林さんにお話を伺いました。



林さん

佐賀県赤十字
無線奉仕団・
佐賀県赤十字
特殊輸送奉仕団所属

(林さんのこれまでの軌跡)

2008年(15歳)

青少年赤十字との出会い

高校の生徒会活動の一環で青少年赤十字の活動をスタート。救護訓練に傷病者役として参加したことで、日本赤十字社の活動に関心を持つ。

2011年(19歳)

青年赤十字奉仕団入団

高校卒業後、青少年赤十字の卒業生の集まりに参加した際、先輩に誘われて入団。社会人となりボランティアへの意識もこの時期に大きく変化した。

2019年(26歳)

特殊赤十字奉仕団入団

仕事で取得した資格が赤十字の活動に活かせるのではと考え、特殊赤十字奉仕団に入団。無線奉仕団および輸送奉仕団員として活動中。



活動を経るごとに芽生えたやる気

青少年赤十字活動への参加は生徒会活動がきっかけだったので、自分の意志という訳ではありませんでした。でも、救護訓練に参加するなど赤十字の活動を体験するうちに、徐々にやりがいを感じるようになっていきました。

高校卒業後は、先輩に誘われ青年赤十字奉仕団に入団。入団当初は「ボランティアを楽しくやろう」という意識でしたが、様々な活動を重ねるうちに「ボランティアにしっかり取り組みたい」という心境の変化が生じました。そこで24歳の時に委員長に就任して、団員の“想い”を実現するためヒアリングを実施。他機関や他のボランティア団体と連携し、バルーンフェスタ会場の清掃活動やLGBTについて学ぶ場を設けるなど団員の意見を汲みながら活動を行いました。赤十字の活動だけでは得ることのできない知見の広がり、確かな手応えを感じたのを覚えています。

人間としての成長も実感

佐賀県支部の規定では青年赤十字奉仕団は26歳まで。でも10年も続けてきた活動をここで終わらせるのは…との思いと、仕事で無線資格や中



特殊輸送(県内一周駅伝救急車)活動中の林さん(左)

型免許を取得してこともあり、特殊赤十字奉仕団に入団することを決意しました。

無線・輸送

の専門性を活かした災害救護活動に加え、地域イベントのサポートや県内奉仕団同士の連携を図る「奉仕団研修交流会」にも参加。赤十字での経験や出会いが自分自身の成長につながり、職場での新人教育や後輩指導に役立っていることを実感しています。

理念と人に支えられ今がある

青少年赤十字から今まで続けてこられた原動力は「人を救いたい」という気持ち、そして支部職員や赤十字に関わるボランティアの方々の存在があったからです。同じ理念を持つ仲間だからこそ、年齢や性別、立場、経験が違って垣根を感じることもなく、しっかりと連携を取りながら赤十字の活動を続けられたと思っています。

今はコロナ禍で思うように活動できない状況ですが、1日も早くコロナ以前の活動ができることを祈るばかりです。個人的な今後の活動について、仕事でドローン操作の資格を取得したので、災害時の被災状況の把握や広報活動に役立てたいと考えています。これからも、自分が身に付けた技術を奉仕団活動に活かさないかを考えて、引き続き赤十字の活動を継続していきたいと思っています。

奉仕団研修交流会とは?

2014年から佐賀県支部と奉仕団が主催して、地域・青年・特殊奉仕団同士の連携を図り、活動の幅を広げることを目的としてスタートした交流会。



奉仕団研修交流会にて無線奉仕団について紹介する林さん

赤十字を 次世代へつなぐ



坂本宏明さん

神奈川県支部指導講師・
神奈川青少年赤十字指導者
青少年赤十字出身



石黒朱夏

日本赤十字社 職員
小・中・高と青少年赤十字の
メンバーとして活動

赤 十字の魅力を伝え、次世代につなげるために欠かせない赤十字奉仕団と青少年赤十字のコラボ活動。赤十字奉仕団の支部指導講師であり青少年赤十字指導者である坂本さんと、青少年赤十字の活動がきっかけで赤十字職員となった石黒主事が、コラボ活動の魅力や活動のコツなどについて語り合いました。

赤十字の仲間として高め合う 赤十字奉仕団と青少年赤十字のコラボ

石黒：赤十字奉仕団が青少年赤十字の子どもたちとの活動を通じて、赤十字の活動を推進する魅力やメリットは何だと思われますか？

坂本：赤十字の旗の下、人道の原則を共有している仲間同士が、年齢に関係なく、共に活動できるというのは赤十字最大の魅力です。災害時にボランティアセンターで活動した時の経験ですが、背景の異なるボランティアと一緒に活動するとなると、人を助けたいという思いはあっても意思疎通や共通の価値観を共有することが難しいと感じました。一方、赤十字のボランティアは、しっかりとした基本理念、被災者への思いとニーズに応えようとする意思が明確ですので、コミュニケーションや活動について説明をスムーズに行えました。

また、それぞれが担う役割や方向性も明確ですの

で、活動に対する理解を相手から得やすいと思います。例えば地域の方への声掛けや何かお渡しするのであれば、ふれあい等の子どもたちが得意とする分野を担当し、大人は技術や知識を活かして子どものサポートをする等により、効果的な活動を一緒に模索することが出来ると思います。

石黒：地域の見守り活動にしても、奉仕団だけで一人暮らしの高齢者を訪問するよりも、小中学校の子どもたちと一緒にいった方が、喜ばれるという話を聞いたことがあります。

また、小中学校であれば地域の方々顔見知りなので関係性もできていて、通学路で顔を見かければ「今日も〇〇さん元気そう」と認識できるし、反対に子どもが困っていたら地域の方々が声をかけてくださるとい、助け合いも生まれてきますよね。

坂本：奉仕団が高齢者のお宅を毎朝訪問するのは大変ですが、子どもたちが通学途中で声をかけるなら容易にでき、地域との結びつきを深める活動となります。日頃の奉仕団活動に赤十字のつながりをぜひ活かしていただきたいと思います。

地域奉仕団の場合、救急法や防災に関わる活動をきっかけとして、子どもたちと一緒に防災マップを作成したり、防災訓練を行ったりなどもコラボ活動として考えられます。災害が起きて小中学校が避難所となった場合、学校は子どもたちのテリトリーなので、どこにトイレがあって、水があってということを知っています。子どもたちが協力することで避難所における奉仕団活動もスムーズになります。

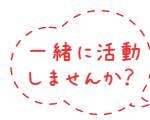
奉仕団にとっては赤十字の輪が広げられ、子どもたちにとっては知識や経験が深まる活動となるので次世代にもつながり、お互いを高める素晴らしいコラボ活動になるのではないのでしょうか。



青少年赤十字100周年記念のコラボ活動の様子。秋田県の奉仕団と青少年赤十字加盟校の高校生がアームカバーを作製した

「手つなぎボランティア」活動の流れ

愛媛県の特徴ある活動のひとつである「手つなぎボランティア」。赤十字奉仕団と青少年赤十字が協力して地域清掃などのボランティア活動を行い、赤十字思想の普及や地域との連携を図っています（P4参照）。



01

年度当初に支部から所属する奉仕団と青少年赤十字加盟校へ実施要項を送付

02

奉仕団から学校へ活動を提案・調整

03

活動後に奉仕団が支部へ活動報告書を提出

高校生とのコラボでは「一緒に考えつくり上げる」ことが大切

石黒：地域におけるコラボの成功事例として、本誌4ページでも紹介している愛媛県支部の「手つなぎボランティア」が挙げられます。30年以上続いているものもあり、こんな活動がもっと増えていけばよいと思っています。

小中学校では地域に根差した活動につなげやすいですが、様々な地域から集まる高校生と奉仕団がコラボする場合には、どのようなことに気をつければよいのでしょうか？

坂本：高校生は日頃から「周囲に活動ニーズがあるか」という視点を持って活動しており、自ら課題を見つけ、自分たちのできることを組み立てています。青少年赤十字では、そういった気づきから考えて行動することを大切に活動を進めてきました。奉仕団からの提案や指導者の意見も大切ですが、子どもたちの活動の原動力となっている生徒自身の思いやモチベーションも大切にしたいです。

また、青少年赤十字はあくまでも学校教育の一環で、学校教育の中に求められるものを実現できるところに大きな特徴があります。学校教育や子どもたちにとっても魅力的なテーマを奉仕団が提供できるかどうかも鍵となります。

石黒：こういった活動であれば学校教育の一環として、組み込みやすいというテーマはありますか？

坂本：一概にはいえませんが、防災、献血、環境問題への取り組み等は組み込みやすいかと思います。しかし、大切なのは何ができるかを対等な立場で子どもたちと「一緒に考え、つくり上げる」ということ。これがコラボを大きくしたり長続きさせたりするポイントです。そして、学校としては単発の活動から継続的な活動へ発展する方が、予定を組みやすいかもしれません。先ほど出てきた愛媛県支部の「手つなぎボランティア」のような毎年恒例のコラボ活動になっていけば理想といえます。



坂本さんは、青少年赤十字から50年も赤十字活動を続けているそう!!

コラボ活動をするに当たり、もうひとつ必要だと思っているのは、コーディネーターの存在です。理念もありマンパワーもあるのが赤十字の魅力なのに、それを赤十字活動に活かしていないのは、マンパワーとニーズのマッチングに課題があるのかもしれない。双方をよく知る青少年赤十字卒業生の奉仕団員などがコーディネーターとして、学校にこんなことができますというリストを掲げ、具体的な提案ができればマッチングしやすくなり、コラボ活動はもっと進むと思います。

コラボの促進で赤十字の輪や赤十字の素晴らしさを広めたい

石黒：「苦しんでいる人を救いたい」という理念のもと、都道府県や国という垣根もなく、ボーダーレスな活動をしている赤十字。私は理念に基づいた活動や経験が、自分をつくってきたと感じています。コラボ活動が、その赤十字を次世代につなげていく礎となるのであれば、どんどん広がっていった欲しいと思います。坂本さんはいかがですか？

坂本：しっかりとした理念を持ち、それを前面に出して行動に移し、かつ子どもたちを育てる視点を持って活動している点で青少年赤十字はパイオニア的な存在です。さらに、卒業後も機会があれば、世界のどこからでも、いつでも活動に参加できるというのが赤十字の大きな魅力です。

「地域の教育人材の活用」や「地域に開かれた学校」が今、注目されています。奉仕団がコラボ活動を通じて「赤十字」の信頼性を活かして学校と関係を構築し、人道の輪を広げていければと思います。



読者のみなさんの声

大募集

RCVをよりよい情報誌にするために、
みなさまのご意見をぜひお聞かせください！

- 1 今号の特集へのご意見・ご感想
- 2 こんな特集が見たい！
「こんな活動がしたい！どこかでしていないかな？」等、
知りたい活動はありませんか？
- 3 活動を全国に伝えたい！
掲載したい活動がありましたら、ぜひお知らせください。
- 4 RCVをメール配信しています！配信をご希望の方は
送信先のメールアドレスをご記載ください。

上記①～④をご記入のうえ、メールにて
rc-volunteer@jrc.or.jp までお送りください。QRコードからも
ご回答いただけます抽選で
10名様に

PRESENT

ハートラちゃん
ボールペン&
青少年赤十字創設
100周年記念缶バッジ
をプレゼント!!

10月31日(月)必着(※)

当選者の方にはメールにて
ご連絡致します。〒105-8521
東京都港区芝大門1-1-3
日本赤十字社 事業局 パートナーシップ推進部
ボランティア活動推進室 青少年・ボランティア課 宛
※郵送の場合は当日消印有効です。ご応募
お待ちしております!

RCV バックナンバー はこちらから →

<https://www.jrc.or.jp/volunteer-and-youth/volunteer/document/>
全国の様々なボランティア活動が見られます。活動のヒントを探しませんか？

Editor's Note

編集後記

この情報誌を通して、伝えるだけでなく自分自身の成長にもつながったと感じております。これからのボランティア活動をはじめ、多くの関わりにおいて、このことを活用出来たらと思います。

(特集1担当/岡山赤十字看護専門学校学生奉仕団 中桐)

様々な人が様々な形で、様々な人のために活動をしていらっしゃることを知ることができ、また今後も世代を超えての協力がより活発になっていくきっかけになれば嬉しく思います。

(特集1担当/青山学院大学 井手口)

困っている人を助けるために頑張っている人が多い中で、人助けの精神について学び直すことができました。この情報誌がボランティアを行っている人の役に立てば幸いです。

(特集1担当/青山学院大学 佐藤)

取材を通じて、困っている人がいたら、助けるべく行動を起こすという学びを再認識致しました。RCVの編集作業を通じて学んだことを、これからのボランティア活動に活かしたいと思います。

(特集2担当/赤十字語学奉仕団 山下)

取材をする中で、人とのつながりがボランティア活動の魅力の一つであり、そのつながりが人を支えるのだと学びました。また、誰かのために考え、行動することの大切さを感じました。

(特集2担当/上智大学大学院 高橋)

編集委員の活動を通して、自分じゃない誰かのために行動を起こしている沢山の人の存在を再認識することができました。この情報誌が、そんな方々を勇気づけるものになっていれば嬉しいです。この経験を今後活かしていきます。(特集2担当/明治学院大学 栗田)

今回の編集に携わり、人助けの形には様々なものがあるのだという学びを得ることができました。この情報誌がそれぞれの想いを共有させ結びつけていけるような存在になれば幸いです。

(特集2担当/明治学院大学 武井)

RCVの編集や取材を通じて、赤十字活動の意義や実際に活動されている方の思いと情熱を実感しました。貴重な体験をすることができ、サポートして下さった方々に感謝しています。

(特集3担当/青山学院大学 水留)

編集を通じて、日本赤十字として様々な世代の方が、困っている人々を助けるための活動をしていることができていました。これで終わりにせず、今後も日本赤十字にかかわる活動について注目していきたいと思えます。

(特集3担当/上智大学 田中)

編集を通じて、助けを求めている方のために働きかける方々の存在を知ることが出来たと共に、その活動の素晴らしさを再認識することが出来ました。また、この先より多くの方が手を取り合い、助け合える社会になることをお祈りしております。(特集3担当/聖心女子大学 大沼)